

BRH News

サマースクール「サイエンスコミュニケーション展示を作る」

2001年8月23・24日、こちらから教えたり伝えたりするのではなく、一緒に考え、手を動かして形を残すことを目的にしたサマースクールを行った。

館内に展示中の「骨と形」展にあわせて「骨格」についての疑問や、面白いと感じたことを展示できる形にするのが課題。たった2日で展示を作るのは、無理な話なので、まずは伝えたいこと、やりたいことをあらかじめメールで知らせてもらい、科学面のサポートは青山裕彦研究員に、表現については私の担当で、8名の参加希望者とメールの

やりとりをした。それぞれ、伝えようとする、資料がない、材料がない、そんなに都合よく生きものはできていない、と難問続出。約1ヵ月半かけたやりとりの末、どうにかテーマと作るものが決まった。

いざ、当日。館長・副館長ともに「小学生の作業の時間になりそう」と楽しそう。

だが、実験に基づく事実という拘束の中での伝える工夫という思考回路は皆、日常使っていない。頭で考えるだけなら何でもできるが、実際にやると難しいことだらけだ。

サイエンスコミュニケーションは、伝えたい内容をもつことと表現力が要求され、表現法の工夫に独創性を活かすところに醍醐味がある。今回のスクールでは、BRHのメンバーも全員参加し、伝えることの選択に悩み、表現法を考え工夫する過程を共有した。最初ためらっていた研究員が意外な才能を発揮するなど、生命誌のコンセプトとともに活動していることの意味を実感したのも大きな収穫だった。参加者の中からこういう仕事をしたいと思う人が出るだろうか。とても楽しみだ。

(工藤光子 / 本誌)



林部京子：関節が曲がる時の筋肉と骨の関係がよくわからないので、作って確かめたい!! 動きを体験できる模型を製作。



谷陽子：拾ったタヌキの死体で骨格標本製作。これにはBRHの研究スタッフが大喜び。実物でたっぷり勉強したのでは!?



水谷達志(左)：手とヒレについて何が同じでどこが違う? 複雑な部分を立体化して、遺伝子の動きと形の違いを伝える。



山岸敦(左)：名古屋大学大学院生命理学研究科に在籍する本職なので、当日は水谷君の科学面をサポート。



浦野亜規：ミミはアゴからできた。事前にBRHに来て蛇、蛙、イモリを解剖し、じっくり観察から開始。2段階踏んだので、当日はわかりやすく省略するという次のステップに入れた。



若林陽子：「関節と生きものの動き」と、テーマ決定は早かったが、実際にものを作る資料を探すのに手間取ったのが残念。最後の発表では作ったものが効果的に活きていた。



雨宮幸江：事前のやりとりが少なかったのが残念。しかし明るくオーウェンの立体模型製作にチャレンジ。



中越有希：上下左右に分かれるへビの顎の動く模型を作って大きなものが飲み込めることを示した。星の王子様に引っかけたストーリー立てで表現!!



BRHの研究スタッフも楽しんだ。

Editor's note

新しい形へ

生命誌研究館を構想してから10年、そのコンセプトの表現の一つとして発行してきた季刊『生命誌』も通巻32号になりました。研究者としては、生きもの研究ほど魅力的なものはないと断言できるけれど、生活者としての私は、社会の中での科学研究のあり方に違和感を覚える。このような落ち着いた状態を解消するために私なりに手にした答が生命誌研究館でした。生命誌という新しい知を具体化する場としての研究館(Research Hall)活動の一つに、科学と社会という言葉を消し、科学を文化として社会に位置づけることができました。そのためには科学を、観察や実験の成果を論文に現し、専門家の評価を得るところで終わらせず、専門外の人も親しめるようにする表現の模索が必要です。音楽、美術、文学などと同じように、専門家の最高の作品を社会の人の誰もが楽しめるようにするにはどうしたらよいか。その試みの一つとして季刊『生命誌』を発行しました。基本は、1) 科学者という人間を表に出す。2) 質は高く、しかしてできるだけ親しみやすくする。3) 美しく表現する。4) 科学を文化として位置づけ、他の文化との関わりを考えるというところに置きました。

当時、このような考え方で発行されている雑誌

はありませんでした。基本をすべて満たすものが作れたかどうかは別として、幸いこの狙いは科学者にも専門外の方にも受け入れられ、楽しんでいただけたことをありがたく思います。ところで、最近、科学技術に大きな予算が動くようになったこと、それに伴って研究者からの発信が重視されるようになったことにより、博物館や科学館が誕生し、大学や研究所に広報が生まれています。そして、美しいパンフレットやジャーナルが発行されるようになりました。このようななか、研究館活動として、『生命誌』が最高の選択かどうかを話し合いました。たしかに、『生命誌』には、思いきり力を注いできましたし、楽しんでできました。しかし、生命誌自体が新しい展開をして第2期に入っていることでもあり、思う存分「今」を表現する方法は他にもありそうです。議論の末、「科学を文化にする(これもどこでも使われる言葉になりました)から抜け出し、自然・生命・人間を考える文化の一つに科学がある、ということまで考えを進め、生命を基本にする総合的な知をつくりあげる場としての「生命誌研究館」をそのまま表に出す方法を探ろうということになりました。じつは10年前の構想にこれは入っていたのですが、よい方法がなかったのです。

思い切ってこれまでの形から抜け出して、次の挑戦を試みようと思います。ここは研究館です。失敗があるかもしれませんが、新しい方法を探ってみます。念のため申し上げておきます。廃刊ではありません。新しい形への模索です。今、皆で知恵を絞って2002年度からのメッセージの送り方を考え、準備をしていますので、楽しみにしてください。長い間『生命誌』への御支援ありがとうございました。『生命誌』33号がどんな形になるかわかりませんが、これからもよろしく願っています。そして、どんどん御意見を下さって私たちが育てて下さいますよう。サンショは小粒でもビリリとしていたいと相変わらず皆元気です。

(中村桂子)

【お詫びと訂正】

本誌31号に誤りがありましたので、お詫びして訂正します。

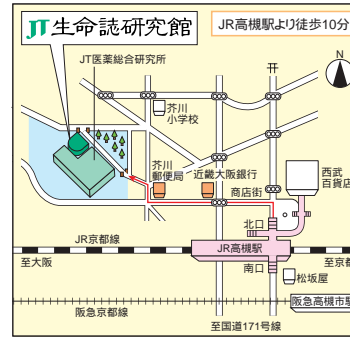
13ページ図2の下から4段目右の環状ゲノムを下記の通り訂正願います。



BRH

JT生命誌研究館 Information

[開館日] 毎週火曜～土曜(祝日の場合も開館)の10:00～16:30(入館は15:30まで) 入館無料
 [常設展] ビデオライブラリー、インタラクティブ・ラボほか
 [特別展] 骨と形 骨ってこんなに変わるもの?、オサムシ 見えてきた進化の姿、光合成 生き物とエネルギー(～2002年3月)、脳の生命誌 仮説を楽しむ、研究を表現する展2「DNAって何?」Part2より(2002年4月2日～4月13日)、共生と共進化 生きものつながり(2002年4月16日～)
 [ホームページアドレス] http://www.brh.co.jp
 [お問い合わせ先] tel.0726-81-9750(代表)



この印刷物は、再生紙と大豆インキを使っています。



BIOHISTORY Vol.9 No.3,通巻32号 Spring

発行日	2002年3月1日
発行	JT生命誌研究館 〒569-1125 大阪府高槻市紫町1-1 tel.0726-81-9793 fax.0726-81-9744(編集部) Eメール biohist@brh.co.jp
プロデュース	中村桂子
チーフ	工藤光子
エディトリアル・ヘッド	高木章子
エディット	鳥居信夫 北地直子 桑子朋子
アート・ディレクション	松田行正
デザイン	斎藤知恵子
制作	プラス・エム株式会社
写植・版下	株式会社モリヤマ
印刷・製本	ジェイティブロスプリント株式会社 関西支店